

【本文】

この経に値ひたてまつる事をば、三千年に一度花さく優曇華、無量無辺劫に一度値ふなる一眼の亀にもたとへたり。大地の上に針を立て、大梵天王宮より芥子をなぐるに、針のさきに芥子のつらぬかれたるよりも、法華経の題目に値ふことはかたし。此の須弥山に針を立て、かの須弥山より大風つよく吹く日、いとをわたさんに、いたりてはりの穴にいとさきのいりたらんよりも、法華経の題目に値ひ奉る事はかたし。さればこの経の題目をとなえさせ給はんにはをぼしめすべし。

【通釈】

この法華経に値い奉ることは、三千年に一度花の咲く優曇華や、無量無辺劫の長き間に一度(浮木に)値う一眼の亀にも譬えられる。また大地の上に針を立てて、大梵天王宮から(一粒の)芥子を投げて針の先に芥子が貫かれるよりも、法華経の題目に値うことは難しい。またこちらの須弥山に針を立てて、向こうの須弥山から大風が強く吹く日に糸を渡そうとして、針の穴に糸の先が通るよりも、なお法華経の題目に値うことは難しい。されば法華経の題目を唱えられることは(誠に有り難いことである)と思いなさい。

【主な語句の解説】

劫：サンスクリット語のカルパの音写文字「劫波」を略したもので、測定することのできない長い時間をいう。
 優曇華：経典上では、三千年に一度だけ開花すると説かれる植物の花のこと。開花は、仏や転輪聖王出現の前兆とされる。
 一眼の亀：諸経(法華経妙莊嚴王本事品第二十七等)の説話に見られる。仏教値遇の難しさを説く。
 大梵天王宮：大梵天王の住居。三界中、色界の初禪天にあるとされる。
 芥子：植物のケシやカラシナの種子のこと。仏教では、微細なもの、僅かなものの譬えに用いられる。
 此の須弥山・かの須弥山：日寛上人は『法華題目抄文段』に「此の須弥山の中央より彼の須弥山の中央に至るまで、十二億八万三千四百五十由旬」(御書文段六六九)と、諸説の一つを示されている。

【背景と大意】

本抄は、小松原法難から一年二カ月ほど経過した文永三(一二六六)年一月六日、日蓮大聖人御年四十五歳の時に認められた御書です。対告衆は不明ですが、本抄の御教示からは女性信徒に与えられたことが推測できます。

内容は、まず信心をもって唱える題目の功德深重なることを明かされ、その唱題の功德で悪業が消滅することを種々の譬えをもって示されています。次に拝読の箇所において、法華経の題目に値遇することの難しさを教示されています。さらに後段では、いかなる者をも成仏させる功德が妙法に存することを説かれ、最後に当時の念仏を唱える女人に焦点を当てて、女人成仏は妙法以外にはないことを強調され、直ちに念仏への執着を捨てて妙法を唱えるよう勧誡し、本抄を結ばれています。

○値い難き正法に値えたことに喜びを感じよう

本抄を拝読しますと、冒頭に「南無妙法蓮華經」（御書三五三）の七字が認められています。総本山第六十七世日頭上人は「これは一番最初に法華經の題目というものをまず挙げられて、この題目を唱えることが末法における成仏の要道であるという意義を顕されておるのであります」（大日蓮・平成十一年八月号）と指南されています。

ところが、本日拝読の御文には、種々の譬えを挙げられて「法華經の題目に値ひ奉る事はかたし」と、末法の衆生が妙法に値うことは極めてまれなことであると説かれています。私達は、これほど値い難き正法に値い、唱え難き題目を唱えさせていただいていることを深く考え、信心に喜びを感じる信行者でありたいものです。そして、御本尊に感謝するとともに、自分に信心を教えてくれた人に思いを致し、その恩返しとして今度は自らが折伏をしていく人になる、このことが最も重要なのです。

○唱題を重ねて折伏を

総本山第二十六世日寛上人は、本抄を解釈されるなかで「一生に一遍の唱題で成仏できるのか」との問いを設けられ、その答えとして「過去に謗法の無い人は成仏できるが、過去の謗法が深重な者は、一遍の題目では到底その罪を消すことはできない」（法華題目抄文段・御書文段六五一趣意）と御教示です。私達は、過去世から多くの罪障を積んでおり、それを消滅させるためにも真剣な唱題を重ねることの大事を教えられています。

その意味からも、私達は家庭で唱題に励むのみならず、『寿量品談義』に「日々に参詣して南無妙法蓮華經と唱へ奉れば、一足の裏に寂光の都は近づくなり」（富要一〇—一九二）との指南を拝し、折ある毎に寺院に参詣し同志と声を合わせて一遍でも多く唱題をするように努めましょう。

さらには、大聖人が「一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勸む」（妙密上人御消息・御書九六七）と仰せのように、一人でも多くの方が妙法を唱えて成仏できるよう、たゆまず折伏を実践し、自他共の幸福境界を確立してまいりましょう。

○日如上人御指南

折伏というのは、まさしく慈悲なのです。苦しんでいる人達、謗法を犯している人達がいたら、私達は、「力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし」（御書六六八）と大聖人様がおっしゃっています。（中略）折伏ということがいかに大事であるか、広宣流布ということがいかに大事であるかを肝に銘じていただきたいと思えます。（大日蓮・令和五年十月号）

明年「折伏前進の年」を、決意も新たに清々しく迎えようではありませんか。